

日支和平を阻む中共軍

さて歴史は進みまして、一九三六年（昭和十一年）に西安事件が起きます。共産党は江西省瑞金に蟠踞して、その兵力約十万と言われていました。これを蒋介石の軍隊百万人が取り囲みます。共産党はここを脱出し、「大長征」と自称していますが、その実は追われ追われて北へ北へと逃げます。終わりには、一九三五年の十一月、延安まで逃げのびるのです。十万の兵力が六千にまで減ったと言われています。中国共産党は死滅寸前まで追い込まれたのです。毛沢東は延安を警備している張学良をそそのかして、蒋介石が督戦のためにやって来たのを捕まえます。西安で蒋介石が張学良の捕虜になったのです。いわゆる西安事件の勃発です。そこに延安から周恩来がとんできます。蒋介石はもはやこれまでと覚悟します。毛沢東も、蒋介石をさらし首にして中国中を引き回そうと主張します。毛沢東の恨みは相当なものです。しかし、その時スターリンから電報が入りました。「蒋介石を生かして、日本と戦わせろ」というのです。毛沢東は地団駄を踏んで悔しがったそうです。スターリンの戦術は、日中を戦わせて、蒋介石も日本も弱ったところで天下を取るといふ戦法です。その戦法通りに実際に今の共産中国が生まれたわけです。かつて、故佐々木更三社会党委員長が中国に行って毛沢東に「中国に侵略して日本は悪いことをしました」と詫びたら、毛沢東は「何をおっしゃいますか。日本が国民党と戦ってくれたから、我々は天下を取れたのです。」と言ったそうですが、まさしくその通りです。我々はこのような時代を経てきたのです。